

# 唇顎口蓋裂の歯科矯正治療の難易判別の基準についての基礎調査

昭和大学歯学部 福原達郎

唇顎口蓋裂による咬合異常の矯正治療は、他の不正咬合よりも困難かつ長期に亘ることは周知の事実である。本調査は、その難易判別基準設定に当り、まず臨床的な基準を定めるための一環としての基礎調査である。

調査対象は、昭和52年より現在に至る間に当院外来した口蓋裂患者120名のうち、側方歯群交換期の片側性唇顎口蓋裂患者男女計13名である。

まずこれら13例の石膏模型のみについて、本治療に10年以上の経験を有する矯正歯科医2名によって、困難なもの(A群)と、比較的容易と思われるもの(B群)に分け、その模型分析と、cephalometric analysis(表1)について比較検討を行った。以下は、その結果である。

## 1. 石膏模型分析

- ① Overjet についてはA群は $-3.5\text{ mm}$ 以上あり、B群は $-3\text{ mm}$ 以下であった。
- ② 上下第一大臼歯の近遠心関係の距離については、予想に反して、両群に差は殆んどない。
- ③ 上下前歯の垂直的被蓋関係についても、②と同様、両群の差は認められなかった。

## 2. Cephalogram 分析

- ① LANBについては、A群は平均 $-0.4^\circ$ 、B群は $+3.0^\circ$ で、明らかに差があった。  
なお、理論的に有意差があると考えられるLSNA、LSNBには大きな差異はなかった。
- ② Point-A、Point-BのOcclusal Plane上の距離の差については、A、B両群に差はなく、同様なことはGonial angleやLSN-Gnについても認められ、理論的推定とは異なる結果となった。
- ③ 上下中切歯のSNまたは下顎下縁平面に対する角度、つまり上下顎中切歯の歯軸については、 $U_1-SN$ に関してはA群は $78.7^\circ$ 、B群 $84.8^\circ$ と比較的明瞭な差があるが、 $L_1-Mn\ Plane$ に関してはA群 $87.2^\circ$ 、B群 $91^\circ$ で、計測誤差の範囲を若干上廻る程度にすぎなかった。

表 1

( 輕 症 例 )

( 福 原 )

計測項目 症例番号	SNA	SNB	ANB	SN/MN	SN/GN	AB/OCC	GONIAL	$\frac{6}{6}$	OV, BITE	OV, JET	UI/SN	LI/MN
8002	78.0	73.0	5.0	41.5	74	3.5	126	2	2	-2	76	90
8022	74.0	73.5	0.5	35.0	69.5	1.0	129	2	4	-4	82	93
8025	75.0	75.0	0	44.0	74	-5	131	-1.5	4	-2	83	83
8031	80.0	76.5	3.5	37.0	76	-1	130	0	4	-2	92	91
8076	75.0	71.0	4.0	41.0	71	2.0	132	5	1	-2	95.5	97
8077	79.0	74.0	5.0	41.0	74	-2	127	2	5	-3	80	92
MEAN	76.8	73.8	3.0	40.0	73.1	-0.3	129.1	1.6	3.3	-2.17	84.8	91

( 難 症 例 )

8009	75.0	76.0	-1.0	3	71	3.5	129	0	6	-5	86	92
8034	72.0	75.0	-3.0	42	76.5	-4	138	-2.8	-1	-6	103	90
8037	78.0	81.0	-3.0	36	81	-9	131	3.4	4	-8	89	87
8040	75.0	73.5	1.5	42.5	76	-3.5	139.5	3.8	6	-6	87	82.5
8054	69.5	68.5	1.0	42	68.5	-2.5	130	-6	5	-3	80.5	90
8089	77.5	76.0	1.5	33.5	76	-4	119.5	4	2	-3.5	46.5	85
8090	78.0	77.5	0.5	35.5	77.5	-0.5	128	-4	7	-3.5	59	84
MEAN	75.0	75.4	-0.4	37.8	75.2	-2.9	130.7	-0.2	4.1	-5	78.7	87.2



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇顎口蓋裂による咬合異常の矯正治療は、他の不正咬合よりも困難かつ長期に亘ることは周知の事実である。本調査は、その難易判別基準設定に当り、まず臨床的な基準を定めるための一環としての基礎調査である。